

## ペルシア語における敬語表現

素材敬語を中心に

Azarparand Sohrab

### はじめに

体系的な「敬語表現」の存在が、語族とかかわりなく、いわゆるアジア諸言語のほとんどの言語の特質であるとよく言われる。日本語を始め、ジャワ語、朝鮮語・韓国語、チベット語、ベトナム語などがその例である(菊地 1994:73-74)。敬語表現では、何よりもまず話者同士の社会的階層、社会的地位の差、年齢の差、文化的な要素、相手との心的距離感などが反映され、それぞれの言語において尊敬語、謙讓語、丁寧語などといった、様々な形で表現される。

さて、いわゆるアジア諸言語と対照的に、インド・ヨーロッパ語族(Indo-European Family of Languages)のほとんどの言語には、日本語と同様の組織化された敬語表現が存在していないと思われる。ペルシア語は、日本語に似た体系的な敬語表現を有する言語であると言えるにも拘らず、インド・ヨーロッパ語族の一部であるインド・イラン語派(Indo-Iranian)に属しているせいも、敬語に関する日本語の様々な文献で未だに「ペルシア語」の名をみたことがない。

イランにおいては、体系的な敬語表現を有すると考えられるアジア諸言語の言語教育の遅れ<sup>(1)</sup>もあり、ペルシア語のこれらの表現は常に同じ言語語族のヨーロッパ諸言語と比較対照されてきた。しかし、複雑かつ体系的な敬語表現を有する以上、ペルシア語の敬語表現を語族と関係なく、同じような敬語表現を有する日本語のような言語と比較対照するのが最も妥当であると考えられる。特に、日本語においては「日本語教育」「グローバル化に伴った円滑なコミュニケーション」「ディスコース・ポライトネス(宇佐美 1998)」「敬語回避(中村 2002:157)」あるいは、日本社会の激しい変化に伴った敬語表現の著しい最新の変化に関し

て「敬語の民衆化」、そして最近の動向について、2006年に、文化審議会の国語分科会から「敬語の指針(報告案)」が提案される等、様々な角度から、敬語表現に関して非常に細かく研究されてきている。

しかし、ペルシア語においては、今日に至るまで包括的な研究が行われていないのが実情である。「現代ペルシア語の敬語」に関してなされてきた若干の研究を観察しても、いわゆる「尊敬表現」「謙譲表現」「丁寧表現」「美化表現」といった呼称でさえ一定しておらず、個々の表現の呼称や性格付けすら研究により、様々である。「敬語表現」を含む「待遇表現」全体に関しても様々な表現名(罵倒表現、尊大表現など)が未だに明確に一定していない。

こうしたなかで、筆者は今日までなされてきたペルシア語の待遇表現に関する先行研究を土台にし、非常に研究が発展した日本語のいわゆる「素材敬語」の構造を視野に入れ、ペルシア語のそれを分析したい。

## 1 敬語は日本語だけのものではない

大野晋(1977:V)は「敬語は、相手との社会的、心理的距離を調節する言語的手段である。この意味では、敬語は世界中のすべての言語にあるはずの普遍的現象である。それがいかにも日本語にしかない特殊な現象と見られることがあるのは、その言語的手段が言語表現としてだけでなく、特定の社会的、心理的距離に対応する特定の言語形式が組織的に整備されているからである」と述べているように、敬語表現は世界諸言語のいずれにも存在するはずであるが、その表れ方が言語によって異なるのみであると思われる<sup>②</sup>。

本来、日本語を軸に世界諸言語の敬語は大きく二種類に分けられるといわれる(南1987:36)。

①日本語型：日本語と同様に敬語が組織的に整備されて、特定の「言語形式」「特定の動詞・人称代名詞」の形で表現されるものである。韓国語、ジャワ語などを始め東南アジアの数多くの言語がこのグループに属していると考えられる。②非日本語型：これらの言語の敬語は「言語形式」を有してもその数が非常に乏しく、敬語は主に「言語表現・表現形式」の形で表れる。英語を含め、印欧諸言語のほとんどの言語はこのグループに属していると思われる。ある言語の敬語表現が「日本語型」に属する指標となるのは、「特定の動詞・特定の人称代名詞」という言語形式であると思われる。例えば、「行く」という動詞を示す尊敬語の「いらっしゃる・お越しくださる・おみえになる等」や、その謙譲語として用いられる「何う・参る・参上する」はその例である。英語を含め、ほとんどの印欧諸言語の敬語にはこのような特定の動詞が存在していないといえる。あるいは、人称代名詞に関しても、例えば、日本語

型である日本語には一人称代名詞のみを考えても「わたくし・わたし・おれ・僕・拙者・小生・うち」など様々なニュアンスを伝える人称代名詞が存在するが、このような特定なものは英語などの印欧諸語には存在しない。本論では、ペルシア語の上述のような特定の動詞・人称代名詞を中心に提供する。

また、いわゆる「日本語型」の敬語を有する諸言語の敬語の特質に関して、「相対敬語と絶対敬語」という分類がある。「ウチとソトの区別」が存在し、それに基づき敬語の使用を決定する日本語のようなタイプを「相対敬語」と呼ぶ。他方、年齢、人間関係により敬語の使用が決められる韓国・朝鮮語のようなタイプを「絶対敬語」と呼ぶ(南1987:53)。これらの敬語の特質は、それぞれの社会システムから顕著な影響を受けていると考えられる。本論の検討の中心からはなれるため、例を用いて詳細な議論を展開することは不可能であるが、この二つの分類に関してペルシア語は中立的な立場をみせることの一例を以下に簡潔に紹介する。

- |                          |                  |
|--------------------------|------------------|
| (1) bande <sup>(3)</sup> | zāde (بنده زاده) |
| 奴隸・下僕・小生・わたくし            | ～生まれの            |
| ‘愚息・わが子・豚児’              |                  |
| (2) qolām                | zāde (غلام زاده) |
| 奴隸；奴僕                    | ～生まれの            |
| ‘奴隸の子供；愚息’               |                  |

このような「相対敬語」的な例も存在する一方で、自分の両親や社長に尊敬語を用いるなど、「絶対敬語」的な敬語の使用も頻繁にみられる。本来ペルシア語では、話し相手の年齢は、尊敬語を用いるべきかどうかという選択に顕著な影響を与える。これは「自分より年配の人物を尊敬しなさい(社会地位・ウチとソト・見知らぬ人・知り合い等と関係なし)」という社会的・文化的な教えによるものであると思われる(Jahangiri 1980:205)。

## 2 ペルシア語も日本語型か？

韓国語・ジャワ語と同じくペルシア語は、日本語型のグループの言語に属すると言えるにも拘らず、日本語の様々な文献、代表的なものとして、宇佐美(1993:20-29)、菊地(1994:73)、南(1977:9)、南(1987:31)、井上(1974:196-230)等においてペルシア語の位置づけを未だ見出すことはない<sup>(4)</sup>。

上述の文献のいずれも、待遇表現・敬語表現に関する非常に詳しい文献であるといえる。

しかし、ペルシア語についてこれらの文献で言及されていないのは、恐らく「ペルシア語も日本語型」であるということが知られていないからであると考えられる。

さて、敬語調査では、日本語のみの場合でも「地域性」が現われることが数多く報告されている。二つの言語、あるいはそれ以上の言語の敬語を対照考察することにより、「国民性」「異文化コミュニケーション」「言語教育」などをより良く把握することも可能であり、非常に重要である。その意味で、日本とイランの両国では、まだ知られていない「日本語とペルシア語の敬語表現の対照研究」が一刻も早く様々な観点から行われるべき課題であると思われる。

先に敬語を有する言語の分類「日本語型・非日本語型、相対敬語・絶対敬語」をみてきた。しかし事実、敬語を有する言語の敬語表現に関して別の種類の分類もある。例えば、辻村敏樹(1977:64)は敬語表現を新たに大きく次の二種類に分けている。

- ①素材敬語：尊敬語、謙讓語、美化語がこれにあたる。(もっぱら話題になっている人物や、話の材料になっているものごとにかかわる敬語である。本論文では紙面の都合により、個々の表現の定義など詳細を省略する。)
- ②対象敬語：丁寧語がこれにあたる。(話し手の敬意を直接的に聞き手に対して表わす敬語である。)

本稿では、上記の分類に従ってペルシア語のいわゆる素材敬語を日本語のそれと対照することにより、簡潔に「ペルシア語も日本語型である」ということを実証することを目的としている。このため、素材敬語として頻繁に扱われる「尊敬語」や「謙讓語」の「特定の動詞や人称代名詞」のみを提供する。これは、日本語とペルシア語の素材敬語を分類した初めての試みになると思われる。ただし、両言語における敬語表現の総合的な対照研究は非常に広範なテーマであり、本研究を土台に様々な視点から取り組むべき今後の課題であると考えている。

### 3 現代ペルシア語における先行研究

ペルシア語の敬語表現を対象とした先行研究は大きく以下の2つに分けられると考えられる。

- ①ペルシア語文法の一部として扱われた敬語表現：本来、敬語表現及び敬語行動は必ずしも完全に純粋な言語要素ではなく、本質的に社会、文化、言語あるいは心理と親密な関わりがあるため、敬語表現を具体的に研究するためには、学問としての社会言語学(sociolinguistics)の視点が不可欠である。しかし、社会言語学が一種の学問として設立されたのは、

1960年(Labov, William)であり、言語教育・言語政策などに非常に重要な役割を果たしているにも拘らず、未だ歴史を重ねた学問であるとは言えない。このためか、1960年までのペルシア語の敬語表現は常に意味論の観点から(あくまでも文法の一部のみとして)検討されており、敬語表現自体をテーマとした具体的な研究は見かけることがない。

このグループの先行研究としてIbraheem(1841)、Phillott(1919)、Lambton(1953)、Hodge(1957)、Moinfar(1978)、Rosen(1979)などが挙げられる。このグループの先行研究に属する日本語文献も、わずかながら存在する。例として、黒柳(1975)や加藤(1974)の研究が挙げられる。ペルシア語の文法を中心に書かれているこれらの文献のいずれも、ペルシア語の素材敬語及び敬語表現を文法の一部として扱い、具体的に包括的な敬語研究であるとは言えない。

②社会言語学の観点からなされた先行研究：この種の先行研究は非常に限られている。社会言語学が一つの新しい学問として設立された後(1960以降)、ペルシア語の敬語表現・敬語行動に関して行われてきた主な研究を年代順に述べると、次のようになる。Bateni(1975)、Jahangiri(1980)、Beeman(1986)、Rajabzadeh(1989)、吉枝(2000)の五つである。Bateniの研究には、話し相手の社会的な地位、人間関係あるいは発話が行われる雰囲気などといった要素が、人物が発する言語表現やそれに対応した言語行動にいかに関与を及ぼすかが説明されている。そして、例文を挙げており、人物同士の発話を聞くだけで、人間関係や上下関係まで推測できると強調する。続いて、「Tafavvoq: (تفاوت)」(年齢の差、学歴、社会的な地位などによる権力関係)と「Yegānegi: (یکسانی)」(同じ年齢、同じ仕事、恋愛、性格的・趣味的な共通点による一種の団結)という二つの要素を社会的・心理的なものとして挙げており、日常会話におけるペルシア語の単数と複数の二人称代名詞(印欧語族のいわゆるT&V)の選択に関して中心的に記述がなされている。最後には、親疎関係、言語表現、言語行動の関わりについても説明があり、ペルシア語の敬語行動に関して、Bateniの研究は初めての社会言語学的な研究であると思われる。この種の先行研究の中で、ペルシア語の敬語表現をより細かく分析しているのは、Jahangiriである。この研究では、敬語行動・敬語表現が社会的・文化的な要素として紹介されており、日常会話における使用の重要性に関して検討されている。Jahangiriは、権力関係を「Solte: (سلطه)power」そして仲間意識を「Hambastegi: (همبستگی)Solidarity」として挙げているが、これはBateniの研究ではTafavvoq(=Solte: Power)、そしてYegānegi(=Hambastegi: Solidarity)と関連付けられ、分析されているのと内容的にはほぼ同一であると言えよう<sup>6)</sup>。Jahangiriは敬語表現に使用される人称代名詞や動詞に関しては、詳しい分類を行っているが、狭義の敬語のみを対象とした研究であるとしても、必ずしも包括的であるとは言えない。ことに、尊敬語や謙讓語で使われる特定の動

詞の分類では、それに挙げられた動詞の数は十分とは言えない。Jahangiriの研究は、ペルシア語の敬語表現を狭義の敬語として検討しているのに対して、Beeman(1986)の研究は、より多面的で広義の敬語としてペルシア語の敬語行動の背景にある社会構造やイランの文化的な要素をも視野に入れて行われている。しかし、Beemanは言語学者というよりも人類学者であるため、イランの伝統的な社会構造、及びイラン文化を研究の中心に据えており、言語学的なアプローチでペルシア語、中でも敬語表現を対象としたものではなく、社会言語学的な観点から、イラン人の言語行動及び敬語行動を検討したものと考えられる。換言すれば、Beemanの検討しようとする話題は主に「人類学」であり、イランの社会構造やイラン社会での言語の役割あるいは、イラン社会とペルシア語との関係をも話題の一つとして設定している。いずれにせよ、この研究には一長一短があり、様々な批判を受けながらも、イランの文化や社会構造、あるいはイラン人の言語行動を知るために社会学者・言語学者そして人類学者の注目を集めており、貴重な研究であることは言うまでもない。また、上述のJahangiriの狭義の敬語と比較すればRajabzadeh(1989)の方が広義の敬語を対象としていると言える。Rajabzadehは文化・社会・宗教的な要素を取り入れたダイアログの例を挙げながら、ペルシア語の敬語を検討している。

さらに、現代ペルシア語の敬語行動を社会言語学的な観点から、実態調査に基づいて検討した最も新しい研究は、日本語で書かれている吉枝(2000)の研究である。先行研究の不足にも拘らず、データに基づいた成果を提示した吉枝の研究では、主にイラン人の敬語行動に焦点を当て検討しており、素材敬語そのものにさほどふれていない。

## 4 両言語における尊敬表現の言語形式

### 4.1. 両言語における尊敬語の特定の動詞

日本語とペルシア語には、共通する尊敬表現の特定の動詞が存在する。「行く、来る、食べる、飲む、見る、言う、くれる、する、あげる」などと言った動詞はその一例であるが、それはそれらの動詞が昔から日常会話に最も頻繁に用いられてきたからであろう。以下に両言語のこれらの動詞の比較を見てみよう。

以下の表で、「特定の動詞」を\*で示す。ここでは挙げる日本語の「特定の動詞」のほとんどが『言語学大辞典』から引用したものである(杉戸1989:1741-50)。ペルシア語の特定の動詞は上述の先行研究の中から引用したり、筆者自身が挙げたりしている。ちなみに、本章では尊敬語、あるいは謙譲語の特定の動詞として挙げるそれぞれの動詞の順番は、尊敬度、あるいは謙譲度に従って並べているわけではない。あくまで両言語において特定の動詞の存

在自体とその数を表すのみである。また個々の特定の動詞の意味あるいは文法的機能に関して稿を改めて論じる。

表1 尊敬語の特定の動詞

動詞	日本語	ペルシア語	
来る	āmadan (آمدن)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* iraššar (いらっしゃる)</li> <li>* oi de ni nar (おいでになる)</li> <li>* o toki shi da sar (お越しくださる)</li> <li>* o mi e ni nar (おみえになる)</li> <li>* go ga ru sa sar (ご苦労下さる)</li> <li>* mi e ru (みえる)</li> <li>* oi de ki da sar (おいでくださる)</li> <li>* go ta ru ki da sar (ご足労くださる)</li> <li>* go kō rō ki da sar (ご光臨くださる)</li> <li>* go lai rō ki da sar (ご来臨くださる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* nozūl-e ejlās/ejlāl farmūdan (国王に対して)</li> <li>(نزول اجلاس/نزول اقبال فرمودن)</li> <li>* sarafrāz farmūdan/kardan (自分が主人の場合)</li> <li>(سرافراز فرمودن/کردن)</li> <li>* qadam ranje farmūdan/kardan (قدم رنجه فرمودن/کردن)</li> <li>* tašrif farmā šodan (تشريف فرما شدن)</li> <li>* tašrif āvardan (تشريف آوردن)</li> <li>* mošarrafa farmūdan/kardan (自分が主人の場合)</li> <li>(مشرف فرمودن/کردن)</li> </ul>
行く	raftan (رفتن)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* iraššar (いらっしゃる)</li> <li>* oi de ni nar (おいでになる)</li> <li>* o toki shi da sar (お越しくださる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* tašrif bordan (تشريف بردن)</li> </ul>
食べる 飲む 食う	xordan (خوردن) nūshīdan (نوشيدن)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* sho shi ga ru (召し上がる)</li> <li>* u ga ru (上がる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* nūš-e jān farmūdan/kardan (نوش جان فرمودن/کردن)</li> <li>* meyl farmūdan/kardan (ميل فرمودن/کردن)</li> </ul>
見る	dīdan (ديدن)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* go ran ni nar (ご覧になる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* molāheze farmūdan/kardan (ملاحظه فرمودن/کردن)</li> </ul>
言う	goftan (گفتن)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* o shi shi ar (おっしゃる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* farmūdan (فرمودن)</li> </ul>
あげる 与える くれる	dādan (دادن)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* ki da sar (くださる)</li> <li>* ku ru (賜る)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* marhamat farmūdan/kardan (مرحمت فرمودن/کردن)</li> <li>* enāyat farmūdan/kardan (عنایت فرمودن/کردن)</li> <li>* mohabbat farmūdan (محبت فرمودن)</li> <li>* lotf farmūdan (لطف فرمودن)</li> <li>* bande navāzī farmūdan/kardan (بنده نوازی فرمودن/کردن)</li> </ul>

いる	būdan (بودن) astan (استن)	*いらっしゃる	* tašrif dāštan (تشریف داشتن)
知る	dānestan (دانستن)	*ご存知である	* mostahzar būdan (مستحضر بودن) * estehzār dāštan (استحضار داشتن)
来る／出席する／出かける	āmadan/hāzer šodan (آمدن/حاضر شدن)	*おでましになる	* nozūl-e ejlās/ejlāl farmūdan (نزول اجلاس/نزول اجلاس فرمودن) * tašrif farmā šodan (تشریف فرما شدن)
着る／穿く	pūšidan (پوشیدن)	*お召しになる	なし
着替える	lebās 'avaz kardan (لباس عوض کردن)	*お召し替えになる	なし
持つ	dāštan (داشتن)	なし	* dar hozūr dāštan (در حضور داشتن) * xedmat dāštan (خدمت داشتن)
死ぬ／亡くなる	mordan/fout kardan/dar gozaštan (فوت/کردن) / اورگذشتن مردن	*死去する *崩御する(皇室関係) *逝去する *隠れる／お隠れになる(皇室関係)	* be malakūt-e 'alā peyvastan (به ملکوت اعلا پیوستن) * dāre fāni rā vedā' goftan (دار فانی را وداع گفتن) * rehlāt farmūdan (رحلت فرمودن) * be rahmat-e xodā raftan (به رحمت خدا رفتن)
思う	fekr kardan (فکر کردن)	*思し召す	なし
寝る	xābīdan (خوابیدن)	*御寝る	なし
する	kardan (کردن)	*なさる *遊ばす	*～kardan →～farmūdan (複合動詞のみ) (～کردن) (～فرمودن)

両言語において以上の特定の動詞以外に、様々な方法で動詞の尊敬語化が行われる。日本語の和語動詞(歌う、読む、書くなど)の場合、「オ+動詞の連用形+になる」「オ+動詞の連用形+なさる」「オ+動詞の連用形+くださる」、そして漢語動詞(名詞+する)の場合には「ゴ+動詞の連用形になる」「ゴ+名詞+なさる」「ゴ動詞+くださる」といった言語形式も頻繁に用いられる。さらに、「オ+動詞の連用形+遊ばす」、「ゴ+名詞+遊ばす」という形式もある(杉戸 1989:1742)。それとは対照的に、ペルシア語の場合、単数の二人称／三人称代名詞に対する複数接尾辞のついた動詞が使用される。

さて、体系的な敬語表現を有する日本語とペルシア語には、動詞の尊敬語化に関してもう

一つの興味深い共通点がある。一般的に書き言葉で用いられるべき様々な単語や表現を話し言葉の代わりに使うことが正式な場にはふさわしく、表現そのものの程度が高くなり、ある意味で尊敬の意味も若干伝わるのではないかと考えられている。日本語の書き言葉では漢語が数多く見られる。例えば動詞の場合、和語の動詞「言う、～に出る」のような話し言葉の動詞よりも、同じ意味を持つ漢語が入っている「発言する、参加する」のような書き言葉動詞を以前に述べた形式で、「ご発言になる」「ご参加くださる」と表現した方が尊敬の程度が高くなる。

ペルシア語にも同様の現象が見られる。ペルシア語には外来語として入って来たアラビア語の単語が数多く存在している。こうしたアラビア語外来語は、現代のペルシア語の中でも特にイラン・イスラム共和国憲法を始め、宗教的な文書、正式な公報、演説、日常会話など、多岐に渡って用いられる。ペルシア語の多くの動詞を「アラビア語名詞 + farmūdan (fermōdan)」という形式に変更することによって、尊敬表現として扱うことができる。この形式は公式な場でよく耳にする。このパターンにより頻繁に尊敬表現に形を変化する動詞の例をいくつかみてみよう。

表2 ペルシア語動詞とアラビア語単語による尊敬表現

動詞	意味	尊敬を表す動詞
āzmūdan (آزمودن)	試す	emtehan farmūdan (امتحان فرمودن)
fekr kardan (فکر کردن)	考える	ta'ammol farmūdan (تأمل فرمودن)
neveštan (نوشتن)	書く	marqūm farmūdan (مرقوم فرمودن)
fahmidan (فهمیدن)	分かる	eltefāt/ 'enāyat farmūdan (التفات/عناية فرمودن)
xāndan (خواندن)	読む	qerā'at farmūdan (قرائت فرمودن)

このように、日本語における漢語の役割は、ペルシア語におけるアラビア語外来語の役割と同様であると言えるのではないだろうか。なぜ両言語において、このような外来語の社会的レベルが高いかということは、これらの単語が昔から、特に知識人達の間で用いられ、庶民の間ではそれほど使われることがなかったからであると推測される。

さらに、ペルシア語において、「名詞 + kardan (کردن)」という形をしている複合動詞の場合には「kardan (کردن)」の代わりに「farmūdan (fermōdan)」を使用すると、尊敬表現に形を変えるのである。このような複合動詞の事例をいくつか見てみよう。

補足すれば、日常会話では以下のグループの複合動詞は、表2に述べたグループの複合動詞より頻繁に使用される。これは日本語の「～する→～なさる」にあたると思われる。

表3 「kardan」を用いた複合動詞とその尊敬表現の例

動詞	意味	尊敬を表す複合動詞
e 'lām kardan ( اعلام کردن )	通知・発表する	e 'lām farmūdan ( اعلام فرمودن )
amr kardan ( امر کردن )	命令する	amr farmūdan ( امر فرمودن )
tavajjo kardan ( توجه کردن )	注意する	tavajjo farmūdan ( توجه فرمودن )
gūš kardan ( گوش کردن )	聞く	gūš farmūdan ( گوش فرمودن )
bāvar kardan ( باور کردن )	信じる	bāvar farmūdan ( باور فرمودن )

このように、「特定の動詞」のところで述べた「farmūdan(fermuden)」という動詞が、「gof-tan：言う(گفتن)」の尊敬語だけでなく、「befarmāin!(farmūdanの命令形で変化した形)：どうぞ(بفرمائین)」や複合動詞の尊敬語化といった場合にもよく用いられ、尊敬表現を表す他の動詞より比較的幅広い役割をしている。これに対応するものとして日本語の「いらっしゃる」という特定の動詞が挙げられる。「行く、来る、いる」といった尊敬語の特定の動詞だけではなく、「いらっしゃいませ!」「いらっしゃい」など、「ようこそ!」の意味を示す場合にも用いられる。さらに、日本語では「～ている」現在進行形を恭しく表現するのにも「～ていらっしゃる」という形でも頻繁に使われる。以下にペルシア語の「farmūdan(fermuden)」と日本語の「いらっしゃる」のいくつかの事例を見てみよう。

\*「farmūdan(fermuden)」に関するいくつかの例文

(1) 'ozr mixām chi farmūdin? (عذر میخواهم چی فرمودین؟)

お詫び致します(単数一人称動詞接尾辞)何(と)おっしゃいました? (複数二人称動詞接尾辞)

‘申し訳ないですが、何とおっしゃいましたか。’

役割→(「言う」の尊敬語の特定の動詞)、口語調

(2) befarmāin bešinīn! (بفرمائین بشینین)

どうぞ(複数二人称動詞接尾辞) 座って(複数二人称動詞接尾辞)

‘どうぞお座りください。’

役割→(「どうぞ!」の意味)、口語調

(3) lotfan šorū befarmāin. (لطفا شروع بفرمائید)

～ください(please) 開始 なさって(複数二人称動詞接尾辞)

どうぞお始めください。

役割→(複合動詞の尊敬語化/～なさる)

\*「いらっしゃる」に関するいくつかの例文

(1)何時までいらっしゃるんですか。 役割→尊敬語の特定の動詞

(2)いらっしゃいませ! いらっしゃいませ! 役割→ようこその意味

(3)岡田先生が研究室で試験問題を添削していらっしゃいます。 役割→現在進行形の尊敬表現

#### 4.2. ペルシア語における代名詞一覧表

日本語同様、ペルシア語にも様々な人称代名詞が存在しており、場の雰囲気や言語形式によって、適宜使い分けられている。これらの人称代名詞は尊敬の念や、親近感、愛情、謙遜、そして軽蔑、罵倒を表現するために用いられる。個々の人称代名詞の存在も「日本語型」の指標になるとは前述した通りである。

まず、日本語の人称代名詞の分類を見てみよう。日本語には、独立した形での複数人称代名詞が存在しておらず、一般的に複数を示すには「単数人称代名詞+達：私達、あなた達など」や「単数人称代名詞+ら：彼らなど」や「単数人称代名詞の繰り返し：我々」と言った形で使われる。このように日本語の人称代名詞は全般的に以下の三つのグループに分けられる。

表4 人称における日本語の人称代名詞

人称	人称代名詞
一人称	わたくし、わたし、わっち、あたし、あたい、おれ、おら、おいら、われ、こちら、こっち、こちとら、うち、それがし、手前、手前ども、自分、僕、我輩、拙夫、予、拙者、小生、不肖...
二人称	あなた、あんた、こなた、おまえ、てまえ、てめえ、そなた、そち、そのかた、なんじ、きみ、おぬし、おのれ、貴兄、貴女、貴君、貴下、貴公、貴殿、貴様...
三人称	かれ、かの女、あれ、あいつ、あのかた、あちら、そいつ、やつ、こいつ、そやつ、御仁...

また、以上に挙げた日本語の人称代名詞の分類に関しては、「和語人称代名詞：わたし、おれ、きみなど」「漢語人称代名詞：我輩、拙者、小生など」「指示代名詞に関係ある人称代名詞：こちら、そなた、かの女など」というような分類もある。

一方、ペルシア語にも人称代名詞が数多く存在している。ペルシア語の人称代名詞は、単数と複数からなっている。これらの人称代名詞の分類を表5に示した後、尊敬の意を表す人称代名詞の意味を表6により詳しく記す。

表5 ペルシア語の様々な人称代名詞<sup>6)</sup>

人称	単数人称代名詞	複数人称代名詞
一人称代名詞	man(من), bande(بنده), injāneb(اینجانب), haqir(حقیر), do 'āgū(دعاگو), fadavī(فدوی), moxles(مخلص), čaker(چاکر), qolām(غلام), jānesār(جان نثار), qolāme xānezād(غلام خانه زاد), aqall-e 'ebād(اقل عباد), kamīne(کمینہ), erādatmand(ارادتمند)	mā(ما), mā bandegān(ما بندگان), mā do 'āgūyān(ما دعاگویان), māhā(ماها), injānebān(اینجانیان), mā erādatmandān(ما ارادتمندان)
二人称代名詞	to(تو: 君; お前), šomā( شما), jenāb 'ālī(جنابعالی), sarkār 'ālī(سرکار عالی), sarkār(سرکار), hazrat-e 'ālī(حضرتعالی), hazrat-e ajall(حضرت اجل), hazrat-e ašraf(حضرت اشرف), badbaxt(بدبخت)「軽蔑的な呼び方」, bičāre(بیچاره)「軽蔑的な呼び方」, mardeke(مردکه/مرتیکه: あいつ; このやろう), mardak(مردک: あいつ; このやろう)など	šomā( شما), 「šomā+ 複数名詞」例: šomā aqāyān( شما آقایان), šomā dānešjūyān( شما دانشجویان), šomā 'azīzān( شما عزیزان)など
三人称代名詞	ū(او), vey(وی), in(ین)「最もくだけた呼び方で、その場にいる人物に対して」, išan(ایشان), išūn(ایشون), hazrat-e ajall(حضرت اجل), hazrat-e ašraf(حضرت اشرف), ūn(اون)「最も砕けた呼び方で、その場にいらない人物に対して」, 'olyā hazrat(علیا حضرت), mo 'azzamollah(معظم له), a 'lā hazrat(اعلا حضرت), xodābiyāmorz(خدا بیامرز), marhūm(مرحوم), marhūme(مرحومه), tefī/teflak(طفلی/طفلاک), yāru(یارو: 奴)mardeke(مردکه/مرتیکه), mardak(مردک)など	a 'lā hazrateyn(اعلا حضرتین), anhā(آنها), ūnhā(اونها), ūnā(اونها)「最も砕けた呼び方」, išan(ایشان), išūn(ایشون)

以上の人称代名詞の中から、尊敬語として用いられるものは大きく以下の二つに分けることができる。

4.3. 尊敬の意を表すペルシア語の二人称・三人称代名詞

表6 尊敬の意を表すペルシア語の二人称・三人称代名詞

人稱	尊敬を表現する単数人称代名詞
二人称代名詞	hazrat-e ajall/hazrat-e ašraf(حضرت اشرف/حضرت اجل)「国王に対して、陛下」、hazrat-e 'āli(حضرت تعالی: 貴殿, sarkār 'āli(سرکار عالی: 閣下, sarkār(سرکار: 貴方; 貴殿)「正式な場。軍隊にも頻繁に用いられる」、jenāb 'āli(جناب عالی: そちら; 貴方), šomā(شما)「複数二人称代名詞」、a 'lā hazrateyn(اعلا حضرتین)「両陛下」、a 'lā hazrat(اعلا حضرت)「陛下(男性形)」、'olyā hazrat(علیا حضرت)「陛下(女性形)」
三人称代名詞	hazrat-e ajall/hazrat-e ašraf(حضرت اشرف/حضرت اجل)「国王に対して」、a 'lā hazrat(اعلا حضرت)「陛下(男性形)」、'olyā hazrat(علیا حضرت)「陛下(女性形)」、mo 'azzamollah(معظم له)「高位の身分がある聖職者に対して」、xodā biyāmorz(خدا بیامرز)「死亡した人への言及(口語的)」、marhūm(مرحوم)「死亡した人への尊称、本来男性形だが、性別と関係なし用いられる」、marhūme(مرحومه)「死亡した人への尊称(女性形)」 <sup>7)</sup> 、išān/išūn(ایشان/ایشون)「複数三人称代名詞」、a 'lā hazrateyn(اعلا حضرتین)「両陛下」

ペルシア語においては、二人称・三人称の単数人称代名詞に尊敬の意を表したい場合、複数人称代名詞や複数動詞接尾辞を使用するという方法もある。これは、以上に述べた特定の人称代名詞よりは、尊敬レベルが比較的ニュートラルであり、使用頻度が高い。(この方式で敬語の意を表す、ドイツ語、ロシア語を含む多くのスラブ系諸言語、フランス語なども同様であり、印欧語族的な特徴であるといえる。)

以上、ペルシア語においても、いかに日本語と同様、数多くの人称代名詞が存在しているかを記述した。さらに、素材敬語として扱われているが、尊敬の意を表す場合に用いられる人称代名詞もみてきた。無論、上述の人称代名詞の実際の使用は、個々の人称代名詞や様々な状況によるが、それに関してはまた別の機会で述べたい。

さて、「両言語における尊敬表現の特定の動詞や人称代名詞」と並び、以下に「両言語における謙讓表現の特定の動詞や人称代名詞」を見てみよう。

## 5 両言語における謙讓表現の言語形式

### 5.1. 両言語における謙讓語の特定の動詞(以下の表では、「特定の動詞」を\*で示す。)

表7 謙讓語の特定の動詞

動詞	日本語	ペルシア語	
来る	āmadan (آمدن)	*伺う *参る *参上する *まかる	* xedmate~rasidan (خدمت رسیدن) * šarafyāb šodan(شرفیاب شدن) * be hozūr-e~šarafyāb šodan (به حضور...شرفیاب شدن) * be dastbūs āmadan (به دستبوس آمدن)
行く	raftan (رفتن)	*伺う *参る *参上する *まかる	* xedmat-e~raftan (خدمت...رفتن) * mošarraḥ šodan(مشرف شدن) * be dastbūs raftan (به دستبوس رفتن)
飲む 食う 貰う 買い受ける	xordan (خوردن) nūshidan (نوشیدن) gereftan (گرفتن)	*いただく *頂戴する	なし <sup>(8)</sup>
見る 会う	didan (دیدن)	*拝見する *拝謁する	* zyārat kardan(「会う」の謙讓語) (زیارت کردن)
言う	goftan (گفتن)	*申す *申し上げる	* xedmate ~ goftan (خدمت...گفتن) * 'arz kardan(عرض کردن) * xedmat-e~ 'arz kardan (خدمت...عرض کردن) * be 'arz resāndan (به عرض رساندن)
あげる 与える	dādan (دادن)	*差し上げる	* taqdim kardan(تقديم کردن) * xedmat-e~taqdim kardan (خدمت...تقديم کردن)
いる	būdan (بودن) astan (استن)	*おる	* dar xedmat būdan (در خدمت بودن)

知る／思う	dānestan (دانستن)	* 存じ上げる	なし
もらう 受ける	gereftan (گرفتن)	* いただく * 頂戴する	なし
聞く 引き受ける	šenīdan (شنیدن)	* 承る	なし
する	kardan (کردن) anjām dādan (انجام دادن)	* 致す	なし
帰る	bargaštan (برگشتن)	* 参る * まかる	* moraxxas šodan <sup>(9)</sup> (مرخص شدن) * az xedmat moraxxas šodan (از خدمت مرخص شدن)

興味深いことに、前述の表1、表4、表5、表6、表7に目を通して分かるが、両言語に尊敬を表す特定の動詞の数の方が、謙譲を表すその数より多い。このように、両言語の日常会話においても、尊敬語の方が謙譲語より用いられるという興味深い共通点のみうけられる。また、上述の「謙譲語の特定の動詞」に関して、日本語の方がペルシア語より多く有する。日本文化で非常に重要とされる「謙遜・控え目であること」が時代の流れに従って、これらの「特定の動詞」が創造されたと考えられる。

## 5.2 謙譲の意を表すペルシア語の人称代名詞

表8 謙譲の意を表すペルシア語の一人称代名詞

人称	単数人称代名詞	複数人称代名詞
一人称代名詞	bande(بنده: わたくし; 小生; 下僕), injāneb(اینجانِب): 小生; 私儀; こちら), haqīr(حقیر: 小生; 卑しい), do 'āgū(دعاگو: 小生; 下僕), fadavi(فدوی: 犠牲者; 小生), moxles(مخلص: 小生), čaker(چاکر: 召使; 下僕), qolām(غلام: 奴隸; 召使), jānnesār(جاننَسار: 犠牲者; 下僕), qolām-e xānezād(غلام خانه زاد: 召使; 生まれつきの奴隸), aqall-e 'ebād(اقل عباد: 最小限の者; 奴隸; 下僕), kamine(کمینِه: 小生; 最小限), erādatmand(ارادتمند: 小生; わたくし)	mā bandegān(ما بندگان: 奴隸の我々; 小生達), mā do 'āgūyān(ما دعا گوینان: 我々小生; 下僕達), injānebān(اینجانِبان: わたくし達), mā erādatmandān(ما ارادتمندان: 小生達; わたくし達)

以上いわれる「日本語型の敬語」の指標となるペルシア語の素材敬語、尊敬表現、謙譲表現に扱われる「特定の動詞」「様々な人称代名詞」を簡潔に表にまとめた。これ以外に、前述のようにペルシア語には丁寧語も存在する。しかし、体系的な敬語の存在という観点からみ

て、ペルシア語も「日本語型」に属するということを証明するためには、以上の事例で十分であると考えられる。

## おわりに

本稿では、日本語の素材敬語をベースにペルシア語のそれを分類した。両言語において、素材敬語をこのように比較対照するのは初めての試みであると思われる。ただし、紙面の都合によりペルシア語の個々の特定の動詞などに関する意味・文法的機能の実例を省略せざるを得なかった。本論を土台にそれらの詳細については別の機会に分析することとする。

さて、日本語同様、敬意及び謙遜を表現するこれらの動詞、人称代名詞は、いかに言語行動あるいは言語表現に表明されるのかはまた非常に広範なテーマであり、社会言語学・言語社会学・心理言語学など様々な観点から検討されるべき課題であろう。つまり、これらの素材敬語はまた文化・社会・心理と密接な関わりがあり、その現れ様がこれらの「素材敬語」の微妙な使い方を持つ言語が使用される社会・文化などに影響を受け、左右される。

上述の観点から、日本語同様に、豊富なペルシア語のこれらの素材敬語はいかに対話などに使用されるのかを早急に検討されるべき課題のひとつであると考えられる。あるいは、ペルシア語の敬語表現を日本語など他の言語のそれと比較対照することもいろいろな意味で非常に有意義なテーマであると思われる。

## 註

- (1) イランにおける日本語教育は、1994年にテヘラン大学外国語学部日本語学科が設置されたことにより本格的に始まった。よってまだ歴史が浅く、日本語講師も未だに国際交流基金からの派遣に頼っているというのが現状である。
- (2) 前述したように欧米諸言語には、日本語と似た体系的な敬語表現がほとんど存在していないと言われる。ただし、これらの恐らく全ての言語では、話し手への配慮を表現するために、呼称および単数二人称代名詞と複数二人称代名詞、いわゆる「T&V」の選択が行われる。欧米諸言語の敬語表現を扱う様々な研究のなかで最も全体像をとらえているものとして、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論(Brown & Levinson's Politeness Theory)が挙げられる。

- (3) 本稿では、人名のローマ字表記を参考文献に従い、筆者が記すペルシア語の長母音を「ā、ī、ū」、声門破裂音の「ʔ」を「'」、口蓋垂音の「q」を「q」、後部歯茎摩擦音の「ʃ」を「š」、後部歯茎摩擦音の「ʒ」を「ž」、軟口蓋摩擦音の「χ」を「x」そして硬口蓋破裂音の「ç」を「ç」で示す。
- (4) 事実、岡田恵美子(1987)「ペルシア語の敬語表現」『月刊言語』8: 64-5. に、一枚のみにまとめられた文章では「十世紀前後に形成された現代ペルシア語はきわめて敬語の発達した言葉といえる。尊敬語、謙讓語、丁寧語を巧みにとりまぜて儀礼表現(又は外交辞令)ができるかどうかは教養の尺度となっている。敬語は時代や地方によって勿論、口語体と文章体、男性語と女性語でも微妙に違っている」という指摘があるが、細かいことに一切ふれていない。
- (5) 本来、Jahangiri と Bateni が挙げている Solte あるいは Tafavogh(権力関係: Power)や Hambastegi あるいは Yegānegī(仲間意識)という要素は、Brown, Roger & Gilman, A.(1960) *The Pronouns of Power and Solidarity*. In: Sebeok, T.(ed.), *Style in Language*. M.I.T. Press, pp. 253-276. の研究から顕著な影響を受けているとみられる。この研究はヨーロッパ系言語の人称代名詞を主にテーマとしており、話者と聞き手との権力関係や仲間意識(Power and Solidarity)を検討し、分析を行っている。インド・ヨーロッパ語族に属するペルシア語の単数と複数二人称代名詞の使い分けや分析に関しては上述の研究と共通点が多くみられるが、敬語表現全体の体系(謙讓や尊敬を示す特定の動詞など)そして敬語使用の原因となる社会的・文化的な要素を考える際に、ペルシア語はヨーロッパ諸言語に似ているというよりも東南アジア(日本語、朝鮮語など)の方に似ているといっても過言ではないと考えられる。このため、同じ言語グループに属しているといえども、ペルシア語の敬語体系をヨーロッパ諸言語のそれと同じアプローチで検討するのが不可能であると考えられる。
- (6) 本論文では、ペルシア語の代名詞は、全部代名詞による呼び方(pronouns of address)ではなく、形容詞による呼び方(adjective of address)なども含まれている。「mardak( مردک ), chāker( چاکر )」などがその例である。なお特に「罵倒表現」ではこれらの adjective of address 以外にまた数多く存在する。日本語による意味は表6・表8を参照のこと。
- (7) 本来、現代ペルシア語の文法には、女性形、男性形、あるいは中性形は存在していないが、セム語族のアラビア語からの外来語は若干ではあるが単語レベルで、使用されている。他の例としては、「恋人→(男)ma 'šūq( معشوق ), (女)ma 'šūqe( معشوقه )」「死んだ人への尊称→(男)marhūm( مرحوم ), (女)marhūme( مرحومه )」「ダンサー→(男)raqqās( رقاص ), (女)raqqāse( رقاصه )」などが挙げられる。無論、これらの語彙は女性形であれ、男性形であれ、アラビア語と全く異なる文法構造を有するペルシア語の動詞の活用に何の影響も与えない。
- (8) ペルシア語では、「飲む、食う」の場合には、sarf kardan/šodan( صرف کردن / شدن )という動詞が頻繁に用いられるが、これらは上下関係のニュアンスが入っていないため、謙讓語とい

うよりも丁寧語だと考えられる。

- (9) この特定の動詞は、目上の話し相手、あるいは話題になっている目上の人物のところから  
帰る場合のみに用いられる。

#### 参考文献

- Batani, Mohammadreza(1975)*Masā' el-e Zabānshenāsi-ye Novīn*. Tehran: Āgāh, pp. 203-217.
- Beeman, William(1986)*Language, Status, and Power in Iran*. Indiana University Press.
- Brown, Penelope & Levinson, S.(1987)*Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- Hodge, C. T.(1957)Some Aspects of Persian Style. *Language*, 33-3, pp. 366-369.
- Ibraheem, M. M.(1841)*A Grammar of The Persian Language*. East-India College Fhalleybury, pp. 160-176.
- Jahangiri, Nader(1980)*A Sociolinguistic Study of Tehrani Persian*. London University, doctoral dissertation.
- Lambton, A. K. S.(1953)*Persian Grammar*. Cambridge University Press, pp. 166-171.
- Moinfar, J.(1978)*Grammaire du Persan*. Publie' aree le du Centre National de la Recherche Scientifique, p. 117.
- Phillott, D. C.(1919)*Higher, Persian Grammar*. Calcutta University Press, pp. 68~70.
- Rajabzadeh, Hashem(1989)*Zabāne Ehterām yā Ta' ārof dar Fārsī*「زبان احترام یا تعارف در فارسی」(ペルシア語における敬語表現あるいはタアーロフ)大阪外国語大学。
- Rosen, F.(1979)*Persian Grammar*. New Delhi, pp. 286-288.
- 浅田秀子(1996)『敬語マニュアル』南雲堂。
- 井上史雄(1974)「敬語研究文献解説(外国)」、林四郎・南不二男(編)『敬語研究の方法』、敬語講座第10巻、東京：明治書院、pp. 196-230。
- (1999)『敬語はこわくない』講談社現代新書。
- 宇佐美まゆみ(1993)「談話レベルから見た“politeness”『ことば』現代日本語研究会、14: 20-29。
- (1998a)「初対面二人間会話における『ディスコース・ポライトネス』」ヒューマン・コミュニケーション研究、日本コミュニケーション学会。
- (1998b)「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」、『日本研究教育年報』東京外国語大学、pp. 145-150。

- 大石初太郎(1975)『敬語』筑摩書房。
- (1983)『現代敬語研究』筑摩書房。
- 大野晋・柴田武(編)(1977)『日本語・敬語』岩波講座第4巻、岩波書店。
- 加藤順一(1974)『例文で覚えるペルシア語(イラン国語)の基準文法』南雲堂フェニックス、  
pp. 164-170。
- 上岡弘二・吉枝聡子(2000)『現代ペルシア語の音とカナ表記』アジア・アフリカ言語文化研究60  
号。
- 亀井孝(編)『敬語』『言語学大辞典』第2巻、三省堂、pp. 323-333。
- 菊地康人(1994)『敬語』角川書店。
- 黒柳恒男(1989)『やさしいペルシア語・文法』泰流社、pp. 118-120。
- (2002)『新ペルシア語大辞典』大学書林。
- 鈴木一彦・林巨樹(編)(1984)『研究資料日本文法・敬語法編』第9巻、明治書院。
- 杉戸清(1989)『現代日本語の待遇表現』、亀井孝(編)『言語学大辞典』第2巻、三省堂、pp. 1741-50。
- 滝浦真人(2005)『日本の敬語論』大修館書店。
- 辻村敏樹(1977)『日本語の敬語の構造と特色』、大野晋・柴田武(編)『日本語・敬語』、岩波講座第  
4巻、岩波書店、pp. 46-83。
- 中村明(2002)『日本語のコツ』中公新書。
- 南不二男(1977)『敬語の機能と敬語行動』、大野晋・柴田武(編)『日本語・敬語』、岩波講座第4巻、  
岩波書店、pp. 1-29。
- (1987)『敬語』岩波新書。
- 山田孝雄(1924)『敬語法の研究』宝文館出版。
- 吉枝聡子(2000)『現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究——テヘランの場合  
——』、東京外国語大学博士論文。

(アーザルパランド・ソホラーブ／博士後期課程)